

# 初代藤田清兵衛の芸統

——名古屋能楽堂特別展『藤田家伝来名品展』展覧資料から——

飯塚 恵理人

## 一 はじめに

平成一〇年四月二五日より五月二四日まで、名古屋能楽堂の開館一周年を記念する特別展として、『藤田家伝来名品展』が行われた。同展の展示品目録をパンフレットより引用すると、以下のようなになる。（\*をつけたものは本稿で扱わせて頂いた資料。）

(1) 能管「瓦落」

(2) 折紙（飯塚注：「瓦落」の）

\* (3) 浄岳清休居士と香譽貞薫信尼 画像

\* (4) 笛彦兵衛伝書 馬淵美作守宛

大永四（一五二四）年九月二三日

(12) 天鈿女命 画像

(13) 稽古の図

(14) 古今稀能集 正徳四（一七一四）年

(15) 御能御囃子留

(16) 高安流脇方伝書

\* (5) 血脈相承(笛祖 牛太夫) 藤田清九郎)

\* (17) 淨岳清休 画像

\* (6) 下川丹齋 画像

\* (18) 物翁信覚 画像

(7) 藤田三郎太夫 教訓状

(19) 沢庵書状 下川丹齋宛

(8) 沢庵書状 藤田清兵衛宛

\* (20) 稽古目録 寛永四(一六二七)年二月一三日

(9) 梅花集 呂

(21) 頭付 春

(10) 梅花集 律

(22) 頭付 秋

(11) 大乱 金春七郎

(23) 頭付 下川丹齋伝授 寛永元(一六二四)年五

月三日

目録から伺われるように、この記念展には笛方藤田流宗家藤田六郎兵衛重昭師の御厚意で、尾張藩初代藩主義直に抱えられ、幕末まで御役者笛役を勤めた藤田家の初代清兵衛に関する資料が多く展示された。初代清兵衛は学僧沢庵の甥にあたり、その出自が幸いして、禁裏の能に度々出演した。初代清兵衛の環境について、沢庵との関係については、尾崎久弥氏が「藤田清兵衛重政と代々」に沢庵書状の紹介を行っており、またその翻刻は辻宏一氏が「藤田流笛の宗家所蔵関係文書について―手紙類を中心に―」に挙げておられる。また大谷節子氏は清兵衛が御水尾院から和歌を拝領したことを「藤田清兵衛拝領後水尾院和歌について」に、近衛家との関係について「藤田清兵衛の近衛家往来―尚嗣公記」から」に述べておられる。

清兵衛は京都住のまま、近衛家より尾張藩に仕官することとなる。この時には、清兵衛の芸統が確かであることと、師匠より習事の伝授が済んでいることが条件となったようで、召し抱えられる寛永六年の二・三年前から、師匠の下川丹齋よりの伝授を示す書類が多く与えられている。この展観に前後して、藤田師の御厚意により、私も藤田家伝書

の閲覧・調査をさせて頂くことが出来た。本稿では、『藤田家名品展』で展示された資料より、特に初代清兵衛の芸系、伝授事関係の資料を選び、伺われることについて述べて行きたい。

## 二 『血脈相承』——藤田流の芸統

展示品目録の(5)にあたる。一枚の書類で原題は記されていないが、僧侶の師弟図と同様血脈を意味する朱線で系譜をつないでいる。このことにより仮に『血脈相承』と記した。牛太夫より、藤田家分家で、尾張藩御役者(笛)で一代抱え席として扶持を与えられていた藤田清九郎までの芸系を記している。これは清九郎が尾張藩御役者になる際準備した書類の控えと考えるのが自然であろう。藤田家の家伝として伝わる系図として貴重な資料であるのでここに翻刻した。

〔翻刻〕

觀世世阿弥時代之仁也

笛元祖

牛阿弟子

牛阿弟子

牛太夫

チガイ

美濃又六

法名牛阿卜改ル

又六弟

太郎次郎実子

丹波太郎次郎

左衛門尉

左衛門弟子

彦兵衛弟子

笛彦兵衛尉

中村七郎左衛門

後は一噌を名字二呼

中村一噌

若年新五郎

新五郎

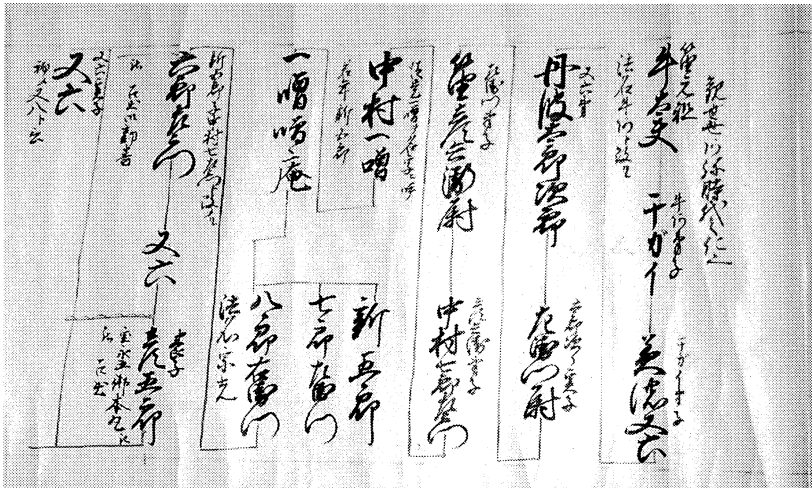
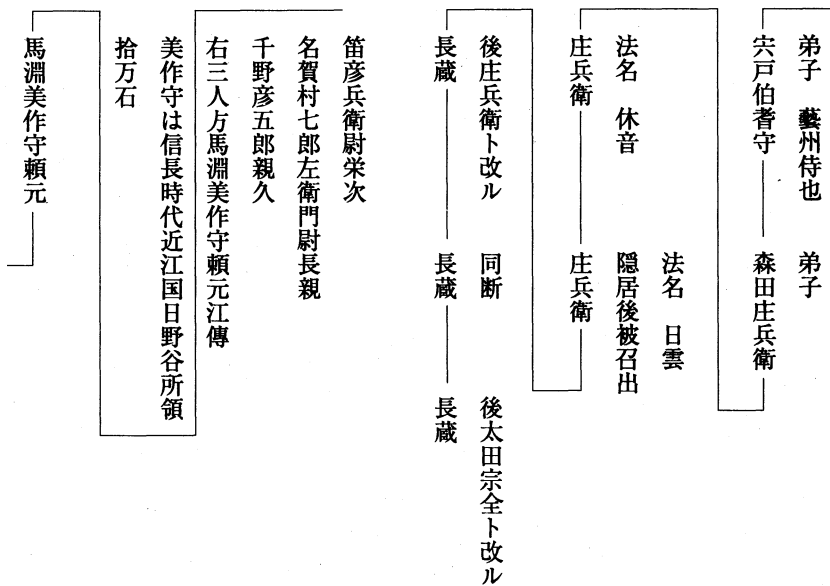
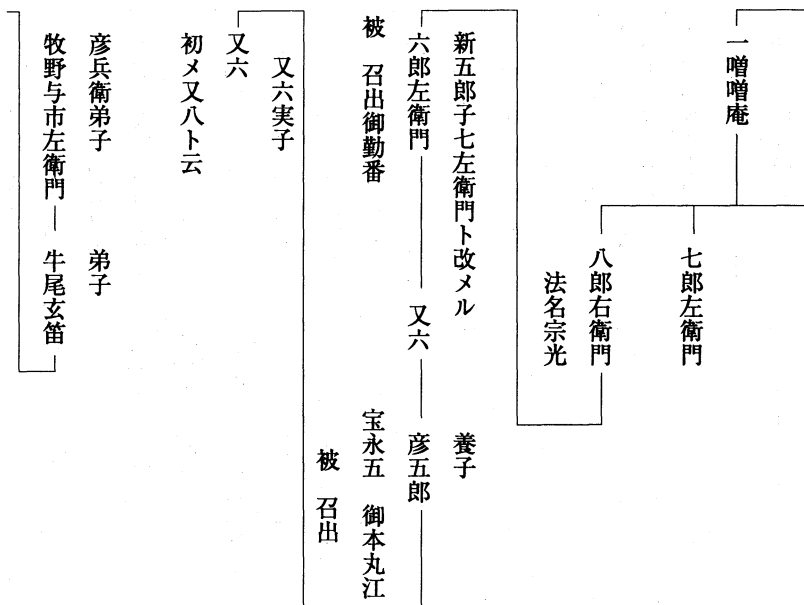


図1 『血脈相承』の冒頭部



七左衛門は頼元甥

下川七左衛門尉重次

受領丹波守法名丹斎

清兵衛は丹斎甥

藤田元祖

親三郎太夫ハ播州住

藤田清兵衛尉重政

生国ハ但州出石生れ

法名 清休

小出大和守郡代役三百石

嫡子

早世二付

藤田清三郎重直

法名宗覚

四男

藤田六郎兵衛尉重貞

後清兵衛ト改メル

法名宗休

藤田六郎兵衛尉

後清兵衛改ル

法名休音

藤田六郎兵衛尉

豊軌

若名六太郎

後清兵衛改

法名了斎

若名 清蔵

藤田六太郎

伊代<sup>シノ</sup>

六郎兵衛ト改

法名宗津

藤田太郎重孝

六郎兵衛重村改ル

後清兵衛ト改

弟藤田清九郎

被 召出七人分

### 三 笛彦兵衛伝書『笛之拔書』

展示品目録の（４）にあたる。この伝書には冒頭に、馬淵源次郎宛の長親の署名と花押が残っている。もとは長親の書簡があつたのであろうが、本書はその残欠部分を残している。本体が馬淵美作守宛の笛彦兵衛の「笛之拔書」という短い書簡形式の伝書であることを考えると、もとは馬淵美作守あての笛に関する書簡を繋げたものであつたろう。

〔前の部分の書簡残欠〕

天文五（一五三六）年二月吉日長親（花押）

馬淵源次郎殿参

〔笛之拔書〕

〔笛之拔書〕

一 へ祝言の笛の吹様。心を、いかにもはつたともつて吹也。心のもちやうによりて、祝言、愁になる。心の習肝要也。

貴顕の人の前にて笛の吹様、呂より吹出す。是も心を信に以てふく也。高音は一ツ也。通例の人の前にてハ、心をさうに以て、いかにもさうに吹也。下の人の前にてハ、さうの呂一ツかんより吹出す。かんの名はちうのかん也。いづれもかしましきハあしかり。人の吹たる次に所望の時ハ、前の吹たるてのつきを吹へし。

惣して人の前にて笛の吹様の事、其座式の貴人の心のことく笛を吹出也。其故は、其貴人の物語、身のさうかうを

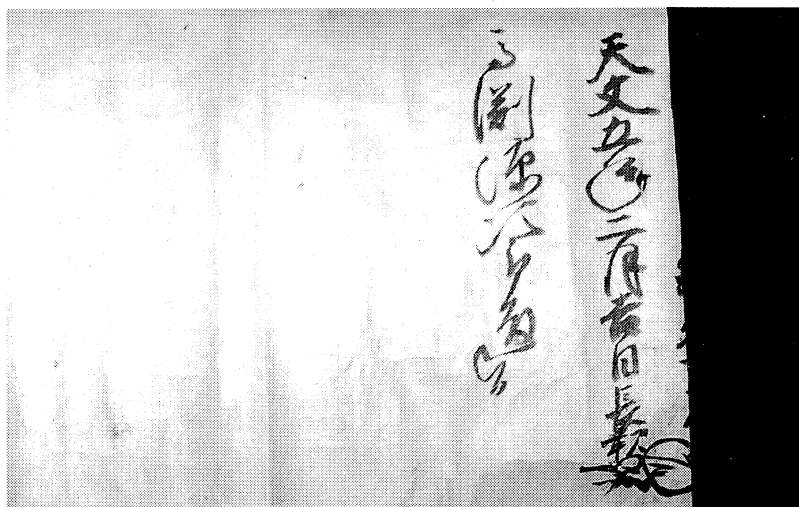


図2 『笛之抜書』冒頭部の、前の書簡残欠部

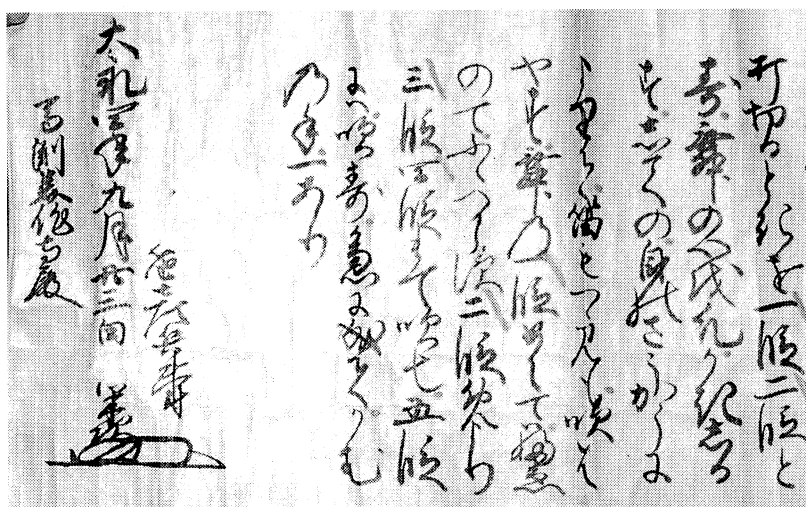


図3 『笛之抜書』奥書

見き、ふく也。おもしろからする事一切わろし。面白く吹くといつは、愁になり、祝言にふき、をのれとおもしろき事本也。是も笛の稽古の大事と云也。

ゆりの数、祝言のゆり、前五ツ・後二ツ以上七也。是かうしやうの祝言也。さうのゆり、前三ツ・後二ツ以上五也。これも祝言也。愁のゆり、前五ツ・後三ツ以上八也。くりあけなとは、前九ツ・後三ツ以上十二也。

一切笛のふきやう、たて花にたとへたり。それをいかにといふに、前物にハ、青きものをそ、互色とりたるやうに、謳などの中をも吹也。

ほど拍子かんよう也。かんの音執の名あり。かんのかん・中のかん・呂のかん、かんのねとりの名也。呂の音取はいつも祝言也。

座式ニての笛の吹様事、さしきをへたてぬれハ、かむより吹出す。おなしまなれは呂のねとり也。

舞の笛事、舞に成て、ハ一段目はさうに、ハ二たむめよりのりて、ハ三段にしつまる、ハ四段めよりつまる、ハ五段急也。壺段式段と云に、鼓打切るときを、ハ一段ハ二段とす。

舞の心を凡かきしるす。しての身のさうかうによりて、笛もつ、みも吹はやす。舞のハ一段めにてハ、ふゑのてふくハからす。ハ二段めよりハ三段ハ四段まで吹也。五段にハ吹す。急に成てかむの手一あり。

笛彦兵衛尉

大永四（一五二四）年九月廿三日 栄次（花押）

馬淵美作守殿

#### 四 『笛稽古目録』

展示品目録の(20)にあたる。藤田家の初代清兵衛の芸系については藤田家に『由緒書』が伝わっており、それは野々村戒三氏によって紹介されている。清兵衛は直接には下川丹斎の伝授を受け、この『由緒書』には「丹斎儀は一子も無御座上、清兵衛儀は、丹斎甥にて、千葉介祐胤子孫、殊に笛執心不浅、旁以家傳笛に秘事能初秘書共、不残相傳致、一流を可相立申旨、被仰付候而、近衛様に御側相勤居申候。」と記される。この『笛稽古目録』は丹斎から清兵衛が皆伝を受けていることを証明するために作成されたものと考えられ、尾張藩に召し抱えられるために準備したものと考えて良いだろう。

この『笛稽古目録』で注目すべきことに、その末尾に「軍陣の吹様」で終わっていることが挙げられる。これは「軍陣の吹様」を伝授されていることが伝授事・習事の皆伝と考えられたということを示すだろう。その後代々にわたって、「陣笛」が特別なものと考えられたことについては『由緒書』<sup>(注6)</sup>に、「其砌、於御側、御直に陣笛被仰付、謹而相勤申候處、目出度との御意被為在、右笛御出陣之節被仰付候へば、御開運被為在、御機嫌能御帰陣被遊候秘事に御座候。」とあることにより伺われる。初代平岩加兵衛の『勤書』<sup>(注7)</sup>にも、「於御軍場軍笛相勤申候儀達御耳、御家御普代被仰付。」とある。これも加兵衛が「御軍場軍笛」のみを勤めたのではなく、伝授事が皆伝であったことを示すための記述であろう。

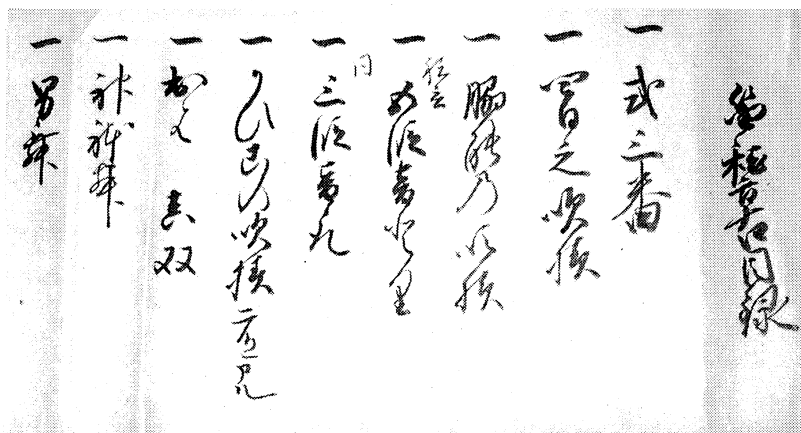


図4 『笛稽古目録』冒頭

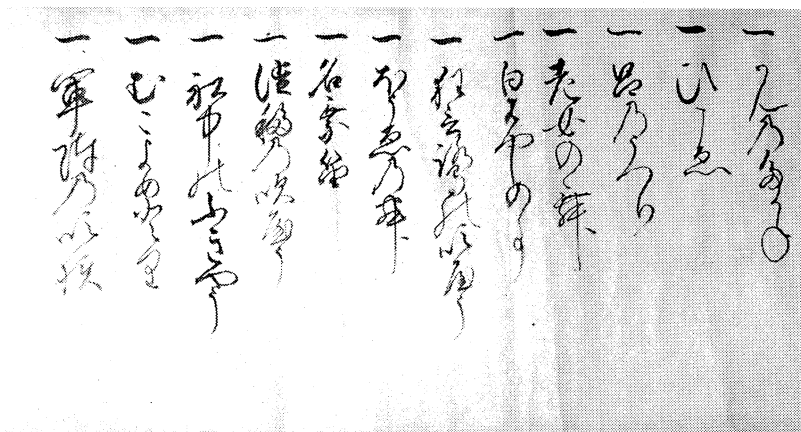


図5 『笛稽古目録』「軍陣の吹様」の部分

## 『笛稽古目録』

- (1) 一式三番 (2) 一四日之吹様 (3) 一協能の吹様 (4) 一祝言 五段音とり (5) 一同三段音とり (6) 一かひこの吹様 二色アル (7) 一出は 真双 (8) 一神躰舞 (9) 一男舞 (10) 一黒頭の舞 (11) 一天女舞 (12) 一翁なしの吹やう (13) 一かつら 五段のねとり (14) 一同三段の音とり (15) 一小手 数有 (16) 一乱序 真双 (17) 一狂言乱序 門まもり共云 (18) 一高音 色々有 (19) 一さかりは (20) 一狂言さかりは 豊後さかりは共云 (21) 一乱れ (22) 一楽 真双アル (23) 一神楽 真双アル (24) 一狂言かくら (25) 一道成寺吹やう (26) 一定家ふきやう (27) 一安宅 ゑんねん (28) 一早笛 (29) 一かけり (30) 一はたらき (31) 一いろへ (32) 一かつこ (33) 一狂言かつこ (34) 一獅子 石橋ニアル (35) 一松風村雨 吹様 (36) 一舞かけり 吹きそらし共いふ (37) 一江口のふきやう (38) 一序舞 (39) 一平調返し・本序共 (40) 一かんのかゝり (41) 一国栖の吹様 (42) 一呂 七つ (43) 一とくさ (44) 一海士 (45) 一當磨 (46) 一湯谷 (47) 一ふし太鼓 (48) 一清経 笛の出はアル (49) 一葵上 (50) 一敦盛 (51) 一山姥 (52) 一誓願寺 (53) 一かんたん (54) 一野々宮 (55) 一井筒 (56) 一融 しゃくの舞あり (57) 一百万 (58) 一通小町 (59) 一半かひこ (60) 一真序 真双行アル (61) 一狂言舞 (62) 一だひかくら (63) 一おとり拍子 しゃやり共いふ (64) 一物着 真双行 (65) 一修羅の音取 (66) 一つき音とりの吹様 (67) 一つき樂のふきやう (68) 一壺丁鼓の吹様 (69) 一壺丁太鼓の吹様 (70) 一つしま笛 (71) 一越 音とり (72) 一平調 音とり (73) 一盤渉 音とり (74) 一雙調 音取 (75) 一ひしきのふきやう (76) 一三輪

- (77) 一 ふたり静 (78) 一 遊行柳 (79) 一 西行  
 桜 (80) 一 関寺小町 (81) 一 あふむ小町 (82)  
 一 伯母捨 (83) 一 ひかき (84) 一 舟弁慶 (85)  
 一 籠太鼓 (86) 一 紅葉駈<sup>(マヤ)</sup> (87) 一 俊成忠則  
 (88) 一 経正 (89) 一 朝長 (90) 一 せんほう  
 (91) 一 短冊之段 (92) 一 龍かゝり (93) 一 ひ  
 ほとき (94) 一 六道 (95) 一 石塔 (96) 一  
 大ゆり (97) 一 小ゆり (98) 一 うれひのゆり  
 (99) 一 かたひしき (100) 一 中のたかね (101) 一  
 下の高音 (102) 一 おるたかね (103) 一 かんのひ  
 しき (104) 一 高音のひしき (105) 一 かわかり  
 (106) 一 手色 (107) 一 つよき指 (108) 一 よはき  
 指 (109) 一 吹たをるて (110) 一 りんゑの手 (111)  
 一 息つき (112) 一 こみきり (113) 一 下無調  
 (114) 一 つけ物 (115) 一 盤渉之舞 (116) 一 同楽  
 (117) 一 双調の舞 (118) 一 かんのたかね (119) 一  
 ひこゑ (120) 一 呂のうつり (121) 一 老女の舞  
 (122) 一 白はやしの事 (123) 一 狂言鷺の吹やう (124)

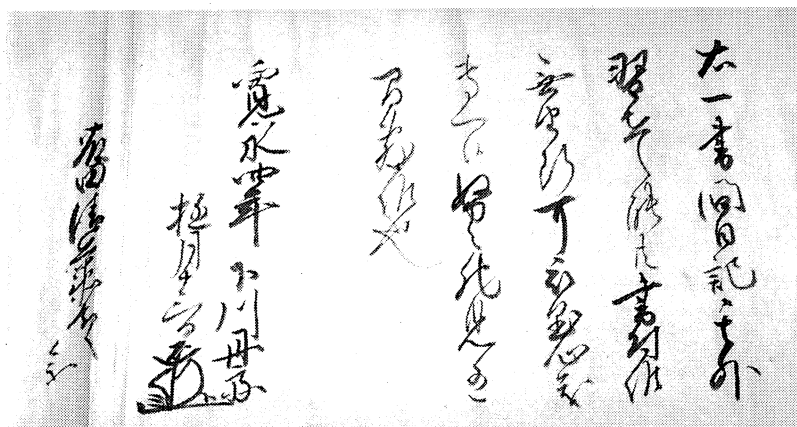


図6 『笛稽古目録』奥書

一 ほうゑの舞 (125) 一 名乗笛 (126) 一 徒移の吹きやう (127) 一 船中のふきやう (128) 一 むこよめ  
とり (129) 一 軍陣の吹様

右一書、間日記其外習在候能共書付候。無由断可被懸心義專一候。努々他見有間敷候也。

寛永四 (一六二七) 年

下川丹斎

極月十三日

(花押)

藤田清兵衛殿

参

## 五 藤田家に伝わる画像―下川丹斎・初代清兵衛重政・藤田重貞

藤田家には、下川丹斎の画像が一点、初代清兵衛重政の画像が二点、三代重貞の画像が一点所蔵されている。このうち①の下川丹斎画像と、②の藤田清兵衛画像は『名古屋市史 風俗編』<sup>(注8)</sup>にも載るが、写真が不鮮明で文字の判読が困難であるので、ここに写真とともに挙げさせて頂いた。

①〔下川丹齋画像〕 展示品目録の（6）にあたる。

願ハたすけたまへや弥陀如来

まうす念仏ハをろかなりとも

笛竹の声も

すがたも消果て

名はかり

のこる曙の空

右心譽丹齋大徳自賛

俗名下川丹波守入道重次

寛永十九（一六四二）

壬午十一月廿三日

卒寿八十有四葬洛大雲院

本光嘯天謹書



図7 下川丹齋画像

②〔初代 清兵衛〕 展示品目録の（17）にあたる。

浄岳清休

但州出石産俗名藤田清兵衛平重政

延寶五（一六七七）丁巳曆九月八日

寿七拾六歳



図8 初代清兵衛画像

③〔初代 清兵衛と妻〕 展示品目録の(3)にあたる。この清兵衛の画像は、妻とともに描かれている。両人の辞世の句が載せられている。

ちりものこらす

空にかへして

露の身も

よのうきふしも

ふえたけの

辞世

延宝五(一六七七)年

丁巳九月八日逝歳七十六

浄岳清休居士 俗名藤田清兵衛重政

香譽貞薫信尼

天和三(一六八三)年

癸亥四月廿二日没歳七十七

辞世

ありかたきみのりの

舟にはやのりて

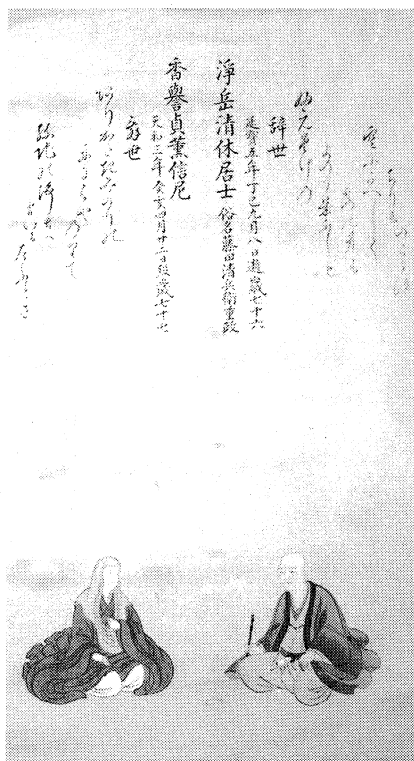


図9 初代清兵衛(浄岳清休)と妻(香譽貞薫信尼)画像

弥陀の浄土へ

まいるたふとき

④〔藤田三右衛門重貞〕 展示品目録の（18）にあたる。重貞は藤田家第三代。（初代清兵衛の長男清三郎を二代目と数えた場合。）初代清兵衛の四男にあたる。この部分では法名を物翁信覚とするが、『血脈相承』では法名を宗休とする。

物翁信覚

平安城産俗名四郎平後三右衛門

平重貞

元禄拾二（一六九九）巳卯年九

月三日 寿六拾有八歳

物翁信覚  
平安城産俗名四郎平後三右衛門平重貞  
元禄拾二年九月三日 寿六拾有八歳



図10 藤田重貞画像

## 六 まとめ

藤田家は、初代清兵衛が義直に抱えられて以来幕末まで、尾張藩の笛方を支え続けた名家である。尾張藩が御役者に要求したことは芸が確かであることと、習事に通じていて藩が望んだ曲をいつでも所演できることである。初代清兵衛は、尾張藩に抱えられる前の寛永四年に、下川丹齋から『稽古目録』を手渡されている。藩の御役者として抱えられる以前に、自分が正統の師より、皆伝の免許を受けていることを証明できる文書を調べていたと考えてよいだろう。御役者となる二年前という年代から考えて、この書類が尾張藩御役者となるために急いで作成されたものとは考えられない。藤田清兵衛は結果的に尾張藩に抱えられたが、あるいは他の藩から声がかかってもお抱えになることができるように、それ以前からこのような書類を準備していたとも考えられる。(急いで準備したと思われるために年月日を変えた可能性も皆無とは言えないだろうが。) 藤田家は、代を重ね、尾張藩から笛方藤田流の「家元」として認められてゆく。藤田流の成立と展開は、名古屋能楽史を考える上で大きな課題である。今後も藤田家関係文書の資料収集と整理を続け、藤田家の歴史を少しでも明らかに出来ればと思う。

### 注

- 1 「第六 藤田清兵衛重政と代々―藤田氏と代々、これまた「芸」の骨髄」 尾崎久弥 『名古屋芸能史(前編)』 文化財叢書 第五号 名古屋市教育委員会 昭和四十六年三月発行 三〇―四一頁
- 2 「藤田流笛の宗家所蔵能楽関係文書について―手紙類を中心に―」 辻宏一 岐阜女子短期大学紀要 第三三輯

- 3 「藤田清兵衛拝領後水尾院和歌について」 大谷節子 「橘香」 平成五年六月発行
- 4 「藤田清兵衛の近衛家往来―『尚嗣公記』から―」 大谷節子 「かんのう」 平成三年二月二〇日号
- 5 『能楽史話』 野々村戒三 昭和一九年一月発行 春秋社 三三三頁
- 6 同注5 三三三頁
- 7 「平岩加兵衛家年譜考」 拙稿 「衣の民俗館・日本風俗史学会中部支部研究紀要」 第八号 平成一〇年三月発行 二頁
- 8 『名古屋市史 風俗編』 大正四年八月発行 名古屋市役所 一六八―一六九頁

補記 貴重な資料の閲覧・撮影を許可頂きました笛方藤田流第十一代宗家藤田六郎兵衛重昭師に感謝致します。また本稿作成に御協力頂きました名古屋能楽堂の河井博氏に感謝致します。本稿は平成十年度文部省科学研究費助成奨励研究（A）「東海地域能楽資料の収集と整理」（課題番号…〇九七二〇三二六）による成果の一部となります。